宗教心理学研究の展開(9)
―仏教(仏教徒)と宗教心理学―

臨床心理学的観点からみた浄土真宗僧侶の宗教活動と宗教心理

浄土真宗本願寺派　高善寺
三原病院　心理療法士
島根県スクールカウンセラー
武田　正文

臨床心理学と仏教

- 臨床心理学の目的･･･悩みや症状の改善

- 仏教の目的･･･仏に成る。苦からの解放

↓

目的は似ている？

人を何とか助けたいという意味では，
臨床心理学との共通

浄土真宗の宗教活動

- 葬儀，年忌法要，法座(寺院の行事)，
  報恩講(年に一回，家庭で)

→儀礼：読経(勤行)，法話，お斎
→僧侶の活動の中心
⇒形骸化?

僧侶としては，宗教活動の意義も感じている

- 五感を通して宗教的な雰囲気を

  視覚･･･荘厳，袈裟などの衣装

  聴覚･･･読経･勤行･称名念仏

  嗅覚･･･線香，焼香

  味覚･･･おとき，精進料理

  触覚･･･正座，痺れる足

- 日常的な門徒(檀家)との関わり

  →何気ない雑談や悩みを相談

  ⇒僧侶としてどのように関わるべきか

こうした僧侶の宗教活動は,
門徒にとってどのような
心理的な意味があるのだろうか?

↓

僧侶の宗教活動が門徒の
メンタルヘルスに果たす役割とは？

↓

修士論文

僧侶の宗教活動に対する意識調査

対象：A教区内の浄土真宗僧侶131名

(551部配布，回収率23%)

方法：アンケート調査(予備調査として面接調査)

【儀礼的な活動】

「通夜・葬儀」「七日参り」「年忌法要」「報恩講」「法座」

【門徒の危機に対する活動】

「心の悩みについて相談を受ける」「病を抱える門徒と関わる」「死に直面した門徒と関わる」「家族の死に悲しむ門徒と関わる」

結果1. 宗教活動の重要性と頻度

重要性

僧侶は
危機
「とても重要である」と半
数以上が認識していた

頻度

「門徒における家族の死」
状況と関
までに
10回以下と答えた僧侶

僧侶ー門徒の意識のズレ

形骸化というよりは,
意識は高いが,
どうしていいか分からないというのが実態

重要であると認識しているが，実際の関わりの頻度は少ないという実態が明らかとなった。

僧侶は，時間の経過に伴って関わり方を変えている

門徒の喪の作業に合わせることを意識

通夜・葬儀：「法話を大切にする」
「故人の人生を振り返る」

七日参り：「死を受け入れる」「人生の再考」
「教義の理解」

年忌法要：「故人を偲ぶ」「命の大切さを知る」

報恩講:「親鸞聖人を偲ぶ」「報恩感謝」「教義の理解」

法座:「聴聞」「教義の理解」「信心」「楽しみ」「荘厳な雰囲気」

→非日常の機会で，門徒に自分を振り返ることを期待
→パーソナリティの形成，価値観，生涯発達など様々な意義がある
→地域社会と密接に関係し，コミュニティに対する役割がある

結果3. 危機的状況における関わりの特徴

宗教的関わり

「宗教的死の意味づけ」
「ただ念仏を称える」
「一緒に読経」

その他の関わり

「話を聞く」
「共感する」
「他機関の紹介」

臨床心理士と近い?

仏教徒からみた今後の課題

僧侶―門徒の間の意識のズレ
門徒の心理が分からない

↓

宗教活動における門徒の心理とは？
（特殊な心理状態ではなく，葬儀や法事での心理）

↓

喪の作業と儀礼の関連?

パーソナリティ，思考などは？

僧侶の関わりの心理的な効果？

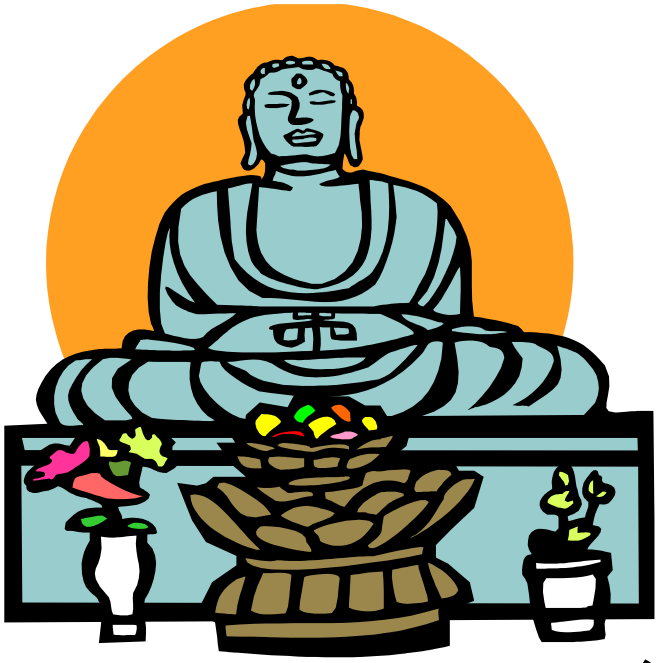
心理療法士からみた今後の課題

臨床心理士と僧侶の共通点と相違点とは？

→お互いに貢献しあう可能性は大きい
(ターミナルケア，グリーフケア，スピリチュアリティ)

→安易に結び付けると危険?

お互いの専門性を活かして協働するためにも，
実践的な宗教心理学研究が必要



ご清聴ありがとうございました。